（別紙 2）

論文審査の結果の要旨

氏　名　　池　麗梅

中国の天台宗は智顗（538―597）によって確立され、六祖とされる荊渓湛然（711―782）によって復興されたとされる。湛然は、智顗の『摩訶止観』に対する大部の注釈『止観輔行伝弘決』など、多数の著作を著わし、その後の天台思想に大きな影響を与えているが、従来まとまった研究がきわめて少ない。本論文は、湛然の主著『止観輔行伝弘決』を中心的に取り上げ、膨大な関連資料を丹念に分析して、同書を湛然の伝記や時代状況の中に位置づけながら、その思想の一端の解明を目指したものである。

本論文は 4 章からなる。第１章は湛然の伝記研究であり、湛然に関する基本的な史料や後代の伝記を検討し、伝記の再構築を図ろうとしている。続いて第 2 章では、その伝記の中でも『輔行伝弘決』の著述年代とその背景というところに焦点を当て、従来の説を批判して新説を提示している。すなわち、同書の再書時期として『摩訶止観科文』に書かれている「元年」を、従来至徳元年（756）と推定していたのに対して、本論文では元号なしにただ元年とのみ言われた 761 年のことではないかという仮説を提示した。また、同書の完成のきっかけとなった「海隅喪乱」を、従来安史の乱（755―763）と関連させて考えていたのに対して、本論文では袁晁の乱（762）ではないかと推定した。それによって、同書撰述に関する従来の通説の矛盾が解消し、時代的な転換期にあって、新たに天台仏教の再生を目指した湛然の意図が明白になった。第 3 章では、同書撰述の意図が明確に示される祖統説を取り上げる。教説の正統性を明らかにする祖統説は、『摩訶止観』の編纂者である灌頂によってすでに示されていたが、湛然はそれをさらに整備し、天台が「教門」（理論）と「観門」（実践）の両方の伝統を兼備していることを、祖統説によって示そうとしたものであることを明らかにしている。第 4 章では、同書の実践理論の一端として、懺悔の問題を取り上げ、それを手がかりに、湛然の運動が単に衰えていたものの復興ではなく、それまで天台止観が無秩序的に行なわれていたのに対して、それを整備して正統的な方法を確立しようとしたものであることを論証している。

以上のように、本論文は、従来通説となっていた『止観輔行伝弘決』の撰述年代の再検討に基づいて新説を提示し、その基礎の上に同書の撰述事情とその意図を明白にした。その新説は今後学界においてさらに検討されなければならないが、きわめて説得力に富むものであり、中国天台宗の展開、並びに唐代仏教の研究に関して大きな貢献をなしたものということができる。同書の思想内容に立ち入っての検討はいまだ十分になされているとはいえず、今後の課題として残されているが、本論文の大きな成果に鑑み、博士（文学）の学位を与えるのにふさわしいものと判断する。